俳句

大津俳句会

落花舞ふそれぞれすきなところへと　井芹眞一郎

足元(あしもと)にはこべらの花愛(いと)しけり　相原　朋子

大試験終えて母にも安息日　一上日登美

我庭にしだれ桜が人を呼び　大塚喜久子

蒼天(そうてん)の眩(まぶ)しき空に初蝶(はつちょう)来　岡崎　浩子

風に乗り鳥のさえづり心地よく　香月のり子

チューリップ大きく口を開けてをり　佐賀　久子

雨あがり花菜に光る銀の粒(つぶ)　佐澤　俊子

山肌と同じ風うけ辛夷(こぶし)咲く　中嶋　清美

俳句

つのはな句会

補聴器に解(と)かれて和む春の宵　志賀　孝子

漫然と生きて菜の花畑まで　田上　公代

路地裏のおしゃべり消えて春落葉　上杉　波

天気図に不穏な春を消去する　矢嶋　道子

春霞　往時をしのぶ杉並木　梅木トキエ

菜種梅雨耳を澄ませて夜の静寂(しじま)　塚本　洋子

朧の夜終末時計のつけてくる　榮田しのぶ

水温むのんびり牛に見つめられ　村田　健二

短歌

大津短歌会・野づかさ

指導　阿木津　英

朝陽さす白木蓮のつぼみ立つ雪降りいづる花見月かな　鞍　岳志

我病めば友の届し弁当を偏食の夫黙って食える　山本　泰子

わが夫は昨日退院したばかり生き生きとしてゴルフの予約す　高村　貴子

歳の差の十違いの姉の背の曲がれる見れば亡き母おもふ　吉田　良子

制服の胸にコサージュ付ける子ら笑い合いつつ自転車を押す　本田　咲

両面には寒の戻りの阿蘇の山春はもうすぐ雪景色なり　田中　玲子

冬の日の乾ける土の二つ三つくぼみに雀らが土浴び遊ぶ　豊岡ミツル

草の間に小さき紫仏の座咲き添えにけり春がきたなあ　小平　善行

若い死をのせて霊柩車去り行けり後には春霧雨降る　吉永　恵子

種芋は掘り返されてかじられて腹ペコ猪二十個食べた　坂本　杲子